



新しいスタイルのLDK

私の町の楽しい新聞

フォーラム

forum

NEW マルコシ宣言
Nothing No!

わたしの町のフォーラム 3万2000世帯へお届けしています

URL: <http://www.marukoshi.jp>

マルコシ リフォーム 検索

●豊かな街づくりを願って、自然派リフォーム「マルコシ」がお届けしています。
●配布地域／安佐北区 中区 東区
●年4回発行。
●編集・発行／マルコシ・フォーラム編集室
〒739-1731 広島市安佐北区落合4-1-7 ☎843-9981

住まいの物語⑫

～茶の間のはなし～



茶の間の風景

小学校に入学した頃は父が海軍の軍人であったので呉市で暮らしていた。家の間取りはしっかりと記憶はないが、六畳が二間と四畳半の狭い家だったと思う。風呂はなかった。台所は外に設えてあった。小さな水屋と米櫃と丸い折畳みの卓袱台は鮮明に覚えている。父は海軍中尉で多くのことから畏怖されるれつきとした将校であったが、当時の住まいは狭くつましいものであった。父が家にいることはほとんどなかった。太平洋戦争の末期だからこの家庭も似たようなものだ

茶の間がどのようにして生まれ、なぜ茶の間と呼ばれるようになったか、その起源は明らかでない。ただスペースの使い方としては、家族の食事、団欒、母親の夜なべ仕事、子どもの勉強、父親が新聞を読む、実に多用途に使われていた。ときには近所の人や友人たちが気軽に上がり込める内向きの接客空間でもあった。茶の間は農家の囲炉裏などとは一線を画している。その使われかたを考えると明治以降の近代的和風住宅の育まれたものに違いない。その発生は西洋の住宅から間接的な影響があったと考えるほうが分かりやすい。

一家団欒という考え方
明治以降の日本の近代住宅は書院座敷を主体とした和風住宅に、ホールなどを中心とした洋風部分を接木したよう邸宅を

生み出した。洋風住宅への憧れが、伝統的な接客重視の考え方と結びつき、大正から昭和にかけて都市中流層のための中廊下式住宅に結節していった。当初、南側玄関寄りに洋風の応接間と主人の居室や客間の座敷が並び、北側に台所などのサービス部分と茶の間が配置されていた。その後、徐々に茶の間は南側の中心部に進出していった。

戦後復興の過程で、狭小な居住面積を如何に有効活用するかという視点から、まず食事と就寝のスペースを分離すること、動線を機能的に計画することなどが公共住宅を中心に推進された。またアメリカのモダンリビングの影響も目覚ましく、居間を中心に個室が配置される形式や住宅設備の高度化は、現在にまで続いている現象である。そしていつの間にか、茶の間が消失していることに気付く。

茶の間が消えた理由

茶の間は、家庭内や親しい間柄の内向きの団欒など、きわめて複雑であいまいな機能が複合した空間であったといえる。しかも、それが必要とし、かつ可能にしたのは、洋風の応接間や表向きの座敷の存在だった。応接間や座敷において、表向きの接客や公式の行事が行なわれることによって、気のおけない雰囲気のある茶の間を使うことができた。しかし戦後は、住宅難からの復興過程であっただけでなく、家庭内民主主義の発展過程でもあった。家庭団欒の重視にしても、それは

は主人の役割としての公的な接客の否定であり、家族は平等であり、一つのまとまりとして社会に向き合っているという考え方である。暖味で多用な用途から成立している茶の間からリビング・ダイニングを中心とした間取りに移行した。このことは、畳式から椅子式への移行を意味していた。

茶の間と共に失われたもの
家族は社会という共同体の一つの単位であるが、自家族という共同体である。このことが居住形式と住居形式の関係でどのように表現されるかを考えてみると、かつて応接間+座敷と茶の間があった時代は、社会一家族一人の本質的な関係がそれなりに秩序立って営まれてきたが、居間中心型では混乱し、それが現代住居の危機の主因になっているように思われる。かつての茶の間はそれほど広いスペースではなかったが、風や光や外とのつながりをうまく利用し、立ち居振る舞いの作法によって、広く使いこなしていた。そして家族の佇まいのなかに陰影や沈黙があった。現代の住宅は、茶の間とともにそれらを失った。

参考文献 中川武著「日本の家」

近き者説へば、遠き者来たらん

喜びの声は風に乗って運ばれる。いい噂はみるみる内に伝播する。人は楽しそうにしているのを見逃さない。人は自然に集まってくる。幸福に満ちた明るい場所に集まってくる。



なつかしい茶の間

戦後復興の過程で、狭小な居住面積を如何に有効活用するかという視点から、まず食事と就寝のスペースを分離すること、動線を機能的に計画することなどが公共住宅を中心に推進された。またアメリカのモダンリビングの影響も目覚ましく、居間を中心に個室が配置される形式や住宅設備の高度化は、現在にまで続いている現象である。そしていつの間にか、茶の間が消失していることに気付く。

家族は社会という共同体の一つの単位であるが、自家族という共同体である。このことが居住形式と住居形式の関係でどのように表現されるかを考えてみると、かつて応接間+座敷と茶の間があった時代は、社会一家族一人の本質的な関係がそれなりに秩序立って営まれてきたが、居間中心型では混乱し、それが現代住居の危機の主因になっているように思われる。かつての茶の間はそれほど広いスペースではなかったが、風や光や外とのつながりをうまく利用し、立ち居振る舞いの作法によって、広く使いこなしていた。そして家族の佇まいのなかに陰影や沈黙があった。現代の住宅は、茶の間とともにそれらを失った。

凡事徹底
くほっとする論語よりく
学びて思われば則ち閑し
知識は単に知っただけでは身に付かない。じつと成熟させる時間を持つてこそ、それまでの体験と照らし合わせて納得したり、これから起こる出来事を予測材料として生かされる。

過ちを犯すは則ち改むるに憚ること勿れ
過ちを怖がって次の一歩を踏み出せずにいたら、成功の法則も失敗原因も探れない。進歩もなければ発見もなく、喜びも生き甲斐も生まれない。

過ちを犯すは則ち改むるに憚ること勿れ
やつてしまった過ちにも、良い過ちと悪い過ちがある。悪い過ちなら性根を叩き直し、良い過ちなら正しい方法を教える。頭ごなしの説教では誰も救えない。

君子は学びて以て其の道を致す
学びは現実に立ち向かう勇氣を与えてくれる。そして学びと実践が人生の内に何度も繰り返され人を育んでいく。実践の伴わぬ知識など床の間の飾り物。

感謝に

山野幸恵と行く 岡元美紀恵と行く 江原文男と行く 金本和宏と行く

ショールーム&歴史探訪ツアーにご参加いただきありがとうございました。

新しい企画もお楽しみに! お問い合わせは ☎843-9981 マルコシまで